

梶田叡一著「教師力再興－優れた教師に満ち満ちた学校に」教育改革選書No. 2、明治図書出版、2010年6月刊を読む(3)

開示悟入の教育のために(3)

開く

1. (1) それでは、「開く」ということは、いったいどういうことなのでしょう。
(2) これは、簡単に言えば、子どもの口から「おやっ」とか「へえっ」とかとか「そんなん」とかという言葉が漏れ出るようにすることです。
(3) あるいは、子どもが何もいわないでも、目だけはキラキラ光らせて、何かに吸いつけられたかのようにすることです。
(4) つまり、一つには子どもの心をそこでの学習課題に対して開くということであり、また同時に、そこでの学習課題がはらんでいる世界の広がりと深さを子どもに対して開くということです。
2. (1) たとえば今、ファミコンに夢中の子どもが非常に多くいます。
(2) そういう子どもの心はファミコンに向かって無条件に開かれていると言っていいでしょう。
(3) そして、次から次へと工夫をこらして開発されるゲーム・ソフトについていつも関心をもって、ファミコンがはらむ世界に対してどんだんのめりこんでいきます。
3. (1) しかし授業となると、なかなかそうはいきません。
(2) 授業での課題や教材は、そのまま子どもが無条件にのめりこめる、というようなものではありません。
(3) だからこそ課題や教材そのものに工夫をこらし、またそれをどのように子どもに対して提示し、取り組ましていくかの工夫をしないでならないのです。
4. (1) 授業をいつでも、「はいっ、今日は教科書の何ページ、何行目から。〇〇君、読んでください」で始める教師がいないわけではありません。
(2) これでは、なかなか心も開かれませんが、教材のはらむ世界をかいまみるというわけにもいかないでしょう。
(3) 子どもが自ら学ぼうという気持ちになってほしいわけですが、本当は、自ら学ぶなどという意識もないまま課題にのめりこんでしまう、というところまで行ってほしいものです。
5. (1) こういう「開」のために、たとえば、ビデオを使っての導入などということが考えられます。
(2) お話の上手な教師なら、落語の枕のように、子どもが今興味を持っている話題から入っていくのもよいでしょう。
(3) もちろん実物教材を使うとか掛け図を使うという方法もあります。
(4) 要は、子どもの心を開き、教材のはらむ世界を開いてやって、子どもを学習課題にのめりこませる工夫をすることです。

P134～136

[コメント]

「開」とは、子どもの心を「開く」こと。教材のもつ世界を「開いて」あげること。そして、子どもを学習すべき課題にのめり込ませる工夫をすること。